

An illustration of two Overwatch characters, Tracer and Ana, shaking hands. Tracer is on the left, wearing her signature white and red tactical armor with a red maple leaf emblem on her chest. She has short, light blue hair and a red visor over her eyes. Ana is on the right, wearing her green and red tactical armor. She has dark hair and a red visor. They are both looking at each other with slight smiles. The background is a blurred, futuristic interior with blue and green lighting.

類稀なる力

SYDNEY KING 著

ストーリー
SYDNEY KING

イラスト
MANDELA SMITH

編集
MEGAN WALKER

デザイン
SOPHIE ERB

クリエイティブ・コンサルタント
JEFF CHAMBERLAIN, CHLOE FRABONI, MIRANDA MOYER,
NESSKAIN, DION ROGERS, JUDE STACEY

プロダクション
BRIANNE MESSINA, CARLOS GARCIA RENTA,
TAKAYUKI SHIMBO, JT TORREA

翻訳
SACHI MORITO

BLIZZARD

ENTERTAINMENT
Blizzard.com

© 2026 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardおよびBlizzard Entertainmentのロゴは、米国およびその他の国における Blizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

このストーリーはフィクションです。本作品に登場する名前、キャラクター、場所、出来事は、著者または作画者の想像による産物または架空のもので、実在する人物（存命中または故人）、出来事、団体、場所に類似するいかなる描写も、風刺的な意図はなく、偶然によるものです。

Blizzard Entertainmentは著者や第三者のウェブサイトもしくはそのコンテンツを管理しておらず、またそれらについて一切の責任を負いません。

類稀なる力

ウォッチポイント・グランド・メサは砂漠の酷暑をも耐え凌げるよう設計されている。そしてこの施設のセキュリティを司る管制室は、轟々と唸りを上げるサーバー群を保護するため凍てつくほどの低温下にあった。メインデスクの上で弧を描くように配置された複数台のモニターが、それを眺める二人——ヘリックス・セキュリティの警備主任としてここに駐在しているシエラ・ターナー・ウッズと、オーバーウォッチのストライク・コマンダーであるソジョン——を青白く照らしていた。

「まず、デッドロック・ギャングによる武器庫への襲撃……あれは陽動に過ぎあれは陽動に過ぎません」シエラはそう言うと、キーボードを打ち込んで数時間前の監視カメラの映像を呼び出した。「私たちが対応に追われている間、奴らの真の狙いは…ここにあった」シエラがキーを叩くと、中央のモニターに映像が映し出された。「この、ノートン保管庫に」

ソジョンは身を乗り出し、目を細めて映像の中の人物を追った。装甲ケースを手にするその姿を捉えた瞬間、嫌な予感が全身を駆け巡る。訓練の賜物であろう洗練された身のこなしは、あまりにも見覚えがあるものだ。その男は筒状の容器を冷凍保存装置から回収してケースに収めると、カメラの方角へと身体を向けた。ようやく明らかにされたその顔を見て、ソジョンは戦慄した。









「そんな、まさか……」

にわかに信じがたい事実言葉に失う。

その人物の正体はデッドロック・ギャングの裏で糸を引いているタロンの一員だとばかり思い込んでいた。しかしそこに映されていたのは、とうの昔に死んだと思っていたオーバーウォッチの元エージェントであり、かつての友人——エムレ・サルオールだった。

「やっぱり」シエラが切り出した。「そうだと思った。この動きと戦い方……元オーバーウォッチ、ですよ？」

ソジョーンは、肯定の代わりにただ視線を返すことしかできなかった。オーバーウォッチの旧基地であるこの施設をまるで亡霊のように動き回るかつての仲間の姿に、身体中の血が冷えていく感覚を覚える。映像の中の彼は、ともに肩を並べて巡回した懐かしい廊下を歩き、現れる先々で古い記憶を呼び起こしていく。思い出されたあの頃の快活な笑い声は、画面上で淡々と実行される計画と到底結びつくはずもなかった。

映像にはシエラが現れ、エムレとの近接戦にもつれこんでいた。ところが次の瞬間、身体に巻きつけられたポーラによってシエラは地面へと叩きつけられる。そうして彼女はエムレを見失い、ついにケースの中の強化剤を持ち去られてしまった。

「この男には協力者がいたんです。それがこの女」

シエラは別角度からの映像へと切り替えた。キャットウォークの上をホバリングするタロンのドロップシップが映る。その荷物搬入口には、もう一つの見知った顔——フレイヤ・スコウの姿があった。

ソジョーンはさらなる混乱に包まれた。記憶の中のフレイヤは、献身的で優秀な捜索救難チームの技術者だったはずだ。武装し、タロンのドロップシップに佇むその姿とは大きく乖離している。

「これは一体、どういうことなの……」

ソジョーンが呟くように言った。

「つまりこういうことですよ」シエラがモニターを指して答える。「奴ら、私たちが今いるこの施設にいたんです。で、私が応戦したけど、強化剤は奪われた。詳しいことは映像を全部見ればわかります。でも、奴らの動機まではわからない……それで、あなたなら知ってるんじゃないかと」

その言葉に、ソジョーンは動揺するばかりの心を努めて落ち着かせた。シエラには心情を見透かされていたようだったが、表に出すのはこれに留めるべきだと気持ちを切り替える。

「IJCによるオーバーウォッチの解散後、元エージェントの中には傭兵に転身した者もいると聞いたわ。だけどあの二人は、そういうタイプじゃ……」その時ソジョーンの頭に

思い浮かんだのは、エムレと対峙したシエラの正確無比で迷いのない動きだった。あの爆発的なスピード、近接格闘の腕前、そして反撃の威力は、いずれをとってもヘリックスの防衛訓練で体得できる範疇を超えている。「そういえばあなたは……単独であの二人に善戦していたわね。そうそうできることじゃない」

シエラは、同意しかねるとでもいうように肩をすくめた。二人との戦闘の映像から自身が体勢を崩された場面を見つけ出すと、それを何度も繰り返し再生した。

「どうかな。いま見ると、結構ノロいし」シエラは溜息まじりに自嘲した。

「あなたの教官は？」ソジョーンが尋ねる。自身の反応速度やフォームをスティックに反省する姿勢は感心に値するが、どう考えてもその実力は自己評価とはかけ離れている。高い志を持つ彼女は、まるで敗北の味に慣れていないようだった。

シエラがソジョーンと目を合わせる。しばらく二人の間に沈黙が流れ、室内にはサーバーの動作音だけが響いていた。そうしてついに、シエラは意を決したようにゆっくりと息を吐いた。

「ヘリックスで高危険度作戦の訓練は受けましたが……あたしに戦い方を教えてくれたのはママです」

そう答えると、シエラは一時停止された先ほどの映像に視線を戻した。キャットウォークの先端に立つ彼女の頭上では、ドロップシップが飛び去ろうとしている。

「あたしは、ママに何が起きたのか知りたいんです。それがヘリックスに入った理由の一つで……あたしにとっては母親だけど、ママはあの二人が盗んだものと同じ強化剤の被験者だったんです。もしママの強さの秘密があれにあるんだとしたら……タロンが何をすつもりなのか調べないと」シエラは姿勢を正し、ソジョーンに向き直る。「コマンダー。あたしは奴らに裁きを下し、盗まれたものを取り戻したいんです。モリソンやレイエスとともに戦ったあなたの元でなら……母についての答えも見つけられるかもしれない」

ソジョーンは、腹底で古傷が鈍く傷みだすのを感じた。シエラはまるで過去を映し出す歪んだ鏡のようだ。ジャックのような自信、レイエスのような野心。そしてどこまでもつきまとう、過去の自分という名の亡霊――。

「キャプテン」ソジョーンは宥めるような口調で言った。「あなたの熱意も才能も稀有なものよ。ヘリックスでなら、それを大いに活かすことができる。このまま真つ当なキャリアを築きなさい」

「これは単なるキャリアの話じゃないんです」

「私たちのところへ来ても、求める答えが得られるとは限らないわ。それにオーバーウォッチじゃ、あなたにとってのよりよい未来は保証できない。ヘリックスで上を目指さない。そのほうが……賢明よ」









オーバーウォッチは沈みゆく船のようなものだ——ソジョーンが最もよく知るその事実は口に出すこともできず、ただ胸に重くのしかかった。存在の正当性も資金繰りも危うく、数年どころか数か月先の見通しすら立たないこの組織に聡明で未来ある若者を縛りつけることは、もはや罪に等しい。約束された将来から逸脱させてしまうだけだ。

シエラはソジョーンの話を手抱強く聞いていたが、その目に宿る決意が揺らぐ様子はない。ソジョーンの示した道の先に、彼女が長年求め続けてきたものは存在し得ないようだった。

「リスクは承知のうえですが」シエラは静かながらも毅然とした声で言った。「あたしに他の選択肢なんてないです。ここでのキャリアは続けます。でも、このチャンスをあたしはずっと待ってた。自分からファイにするなんてできません」

シエラが真っすぐにソジョーンを見据える。その目には、人生を賭けて真実を見つげ出すというただならぬ信念が宿っている。ソジョーンは、これ以上の反論は無駄だと悟った。さらに不都合なことに、シエラは紛れもなく今のオーバーウォッチにとって必要な才能と野心の持ち主だ。エムレとフレイヤの居場所を突き止め強化剤を取り戻すには、彼女の協力が不可欠だろう。

ソジョーンはどうしようもない自責の念に苛まれた。自分は今、輝かしい未来を破滅へと導こうとしている。

答えは溜息とともに出た。

「すでに覚悟は決まっているようね」緩慢かつ慎重な動きで、ソジョーンはデスクの上の手をシエラに差し出した。「わかったわ、キャプテン。本気なら……私たちは歓迎するわ」その言葉は、この決断を避けられない現状に対する諦念を大いに含んでいた。

シエラは差し出された手を固く握り返す。交渉は成立し、沈みゆく船は新たな船員を迎えた。ソジョーンはただ、その錨がこの未来を担う才能にとっての足枷とならないことを祈るばかりだった。

「感謝します、コマンダー」シエラは力強く答えた。「必ず期待に応えますから」